

その他 (事業報告)

オ・ジョンヒさんとキム・ジュンヒョクさんが新潟にやってきた

Oh Jung-hee and Kim Jung-hyuk Came to Niigata

山田 佳子*

YAMADA Yoshiko

1 はじめに

去る12月10日、平成23年度新潟県立大学教育研究活動推進事業 (社会貢献活動推進事業) として採択された「韓国現代作家との対話 in Niigata」を本学1313講義室にて開催した。本事業は韓国で活躍中の現代作家2名を招聘し、県民を対象とした対話イベントの開催を通じて、新潟発の日韓交流の方向性を見出そうとの目的で企画したものである。

このように本来、県民を対象にした企画ではあったが、事業分担者である波田野節子教授が両作家の作品をNHKのラジオテキスト『まいにちハングル講座』に教材として取り上げていたこともあり、同テキストに広告を掲載したところ、全国から参加申し込みがあった。また、韓国文化の総合誌『スッカラ』、韓国文化院ホームページの掲示板などを通して県外からの申し込みを受けた。その他、県内の市区だより、『新潟日報』の告知記事などにより、県内外から90名程度の観客を動員することができた。

招聘作家のうちの一人、オ・ジョンヒ (呉貞姫) 氏は1947年生まれで、1970年代後半から1980年代にかけて韓国におけるフェミニズムの先駆けとなる作品を発表して注目を浴びた。現在も執筆を続けながら、文学賞の審査員を務めるなど重鎮としての位置にある。もう一人のキム・ジュンヒョク (金

* 新潟県立大学国際地域学部 (yamada@unii.ac.jp)

オ・ジョンヒさんとキム・ジュンヒョクさんが新潟にやってきた

重赫)氏は1971年生まれで、文学以外にも音楽や映像の分野に造詣が深く、様々なジャンルに活躍の場を広げる新しいタイプの小説家である。この日行われた作品の朗読の中でも自作の音楽映像を披露してくれた。

当日は午前作家紹介と、作家による自作品の朗読が行われた。午後はシンポジウムという形をとりつつも、特定のテーマに限定することなく、観客の関心に沿った様々な話題を取り上げた。また、「対話」という形を重視し、観客からの質問も多数受け付け、作家の話に耳を傾けた。

イベントの翌日は「新潟で韓国と北朝鮮の現代小説を読む会」のメンバー12人が参加して両作家を囲んでの懇談会を行い、韓国の現代小説や両作家の作品世界についてのより深い話を聴くことができた。

本稿は、事業の成果報告の一つとして、両日の日程の中で知り得た両作家の執筆に対する考えや作品世界に関する内容を、筆者の解釈を加えてまとめたものである。

2 地方と文学

オ・ジョンヒ氏は、新潟と聞いて先ず、北朝鮮への帰国船の出航地だということを思い浮かべたという。理念とは無関係にただ祖国、故郷を求めて家族を残して帰国した人々の悲劇の歴史に、作家として深く感じるものがあると語った。

一方のキム・ジュンヒョク氏は、小説『雪国』の冒頭の一節にあるように、トンネルを抜けると本当に雪国なのか、ビデオに撮ってくるようにと知人から言われたという。川端康成が小説に描いた都会人の知らない雪国の模様が、今では映像を通してたやすく体験できるようになったのだということを改めて知らされる発言であった。

新潟同様に、ソウルという中央から離れた土地で育った両作家に、自身の作品と土地とのつながりについて語ってもらった。

2-1 水がもたらしたイメージの世界—オ・ジョンヒ氏

オ・ジョンヒ氏は、実際に新潟の町を歩いてみて、自身が幼年時代を過ごした港町の仁川を思い出し、親近感を覚えたという。朝鮮戦争前に北から脱出してきた両親のもとソウルで生まれたオ・ジョンヒ氏は、戦争の勃発により幼少期に忠清南道で避難生活を送ったあと、小学校2年生のときに仁川に移り住み、卒業までをそこで過ごした。

現在は江原道の春川に住んで35年になる。夫の仕事の関係でそこに移ることになったとき、周囲の人々は文学的な刺激がない、競争者がいない、などと心配したという。当時は成功するためにはソウルに住んでいることが必要な時代であった。しかし、文学は一人で行う仕事なのだから却って好ましいのではないかと言う人もいたという。いずれにしろ、自らの選択によるものではない土地との出会いが、氏の文学に与えた影響は小さくなかったように思われる。

文学は風土と深いつながりがあると語った。ドラマ「冬のソナタ」のロケ地として日本でも有名になった春川の風景は「水」と「霧」からなる。ただし、氏にとっての水は、ドラマのロマンチックなイメージとは異なり、不安、不透明、不確かさ、陰謀といったものを想起させ、底に潜むものを暴き出したい欲望を引き起こさせるという。自分の住む土地に対して愛と憎の相反する感情があるが、作家としては第三の目を持ち、自由な魂で作品を描きたいと語った。

このいささか抽象的な説明を通し、小説の中にイメージの世界が広がる氏の作品の根源を見た気がした。春川に移って翌年に書いたのが仁川での幼年時代を描いた「中国人町」である。「中国人町」は黄色のイメージで覆われた作品である。主人公の少女は腹の中の回虫駆除のために学校でしばしば飲まされる「サントニン」により、目の前がぐるぐる回る症状におそわれる。そして世界がすべて黄色に見える。

この黄色の意味について尋ねると、やはり不安、恐れ、拒否感の表現だという答えが返ってきた。それは昼寝から目覚めたときに周囲の世界にすぐに溶け込めない感じに近いという言い方もしてくれた。引っ越してきたばかりの仁川の町、そして隣接する中国人町に住む初めて目にする異国の人々、米軍兵士、娼婦らは少女にとって不安や恐れの対象であった。だが同時に、思春期の少女にとっては好奇心の的でもあった。時おり窓から顔を覗かせる中国人の男性に対する不思議な感情の正体に少女自身はまだはっきりとは気づいていないが、この町で初潮を迎えた少女は大人の女性への第一歩を踏み出す。

オ・ジョンヒ氏の話をつまやかに聴きながら、氏の小説の根源にある不安や、不確かさなどが具体的に何に起因するのかといった問いを投げかけることは、それ自体が無意味なことのようになってきた。単なる疎外感であるとか、当時、軍事政権下にあった韓国社会の揺れの表現だと解釈してしまうにはあまりに深い、女性として、そして文学者としての思想が含まれているように

オ・ジョンヒさんとキム・ジュンヒョクさんが新潟にやってきた

感じた。

「韓流」が自身の作品や生活に及ぼした影響について問うと、自宅近くで日本人や中国人を多く見かけるようになったことくらいだという。「冬のソナタ」は評判を聞いて、ある日まとめて見始めたはやめられなくなったという。女性が恋愛に対して抱いている憧れの要素を全て満たしたドラマだと解釈してくれた。素顔のオ・ジョンヒ氏は作品の謎めいたイメージとは異なり、恋愛やおしゃれの話をしたら止まらない女性と見受けられた。

2-2 音の世界への心酔—キム・ジュンヒョク氏

忠清北道の金泉で生まれ育ったキム・ジュンヒョク氏は、ソウルには当たり前にある物がそこにはなかったということが少年時代のほろ苦い思い出だという。たまたま珍しいレコードを見つけると、買いに行くお金ができるまで友人には秘密にしておいたというエピソードも語ってくれた。1枚のレコードが貴重で、何度も聴き、それだけ深く音楽の世界に没頭できたのではないかと自ら分析する。現在はソウル近郊の新興都市に住む。ソウルに近いがソウルではない「周辺」のその土地は、物事を一步引いて、客観的に見ることのできる場所であり、作家にはそのような視覚が重要だと語った。

短編集『楽器たちの図書館』は全体として音楽という共通のテーマが流れる作品で構成されている。カフェで音楽を聴きながら執筆することを習慣とする氏は、それらの小説をクラシックを聴きながら書いたという。表題作の「楽器たちの図書館」は偶然、楽器店で働くようになった主人公が、珍しい楽器を集め、その楽器の音そのものの録音に熱中していく話である。この作品の中に、主人公がCDで音楽を聴いているときに得られる感動を生演奏では感じるできないというエピソードが出てくる。同じ作品集の中の「自動ピアノ」には、一度もリサイタルをしたことがなく、コンサート会場にも行ったことがないというピアニストが登場する。氏にとっては記録や録音というものが重要な意味を持っているように思えた。地方で育ったことが影響しているのだろうか。

これについて直接、尋ねてみると、ライブへの拒否感があるという予想外の答えが返ってきた。目の前で聴いていて、もし演奏者が間違えたらどうしようと思うと、不安になって演奏に集中できないのだという。また、編集によって最高の状態に達した音楽にこそ真実がある、楽器は「通路」であり、秘密の世界への扉だとも語った。大きな体格の中に秘められた、繊細ながらも確固とした信念のようなものが伝わってきた。執筆に対する姿勢とも感じ

られた。

イベントの後、会場を訪れていた筆者の知人が一冊の本を紹介してくれた。小澤征爾と村上春樹の対談集²である。この本の中で、村上春樹は音楽と執筆の関係について、音楽的な耳がないと文章をうまく書くことはできない、音楽を聴くことで文章がよくなる、と語り、リズム感のない文章は誰も読んでくれない、とまで言っている。キム・ジュンヒョク氏の小説が読みやすい理由の一端をうかがい知ることができた。しかし読みやすいというのは軽いということとは違う。

キム・ジュンヒョク氏は学生時代、図書館でアルバイトをしているときに、国内外の小説をたくさん読んだという。村上春樹とも関連が深いレイモンド・カーヴァーやカート・ヴォネガットなどの作品を通して世界は広いということを知ったという。一方、韓国の小説は似たり寄ったりだった。リアリズム小説ばかりでうんざりしたと明かした。一時は自ら学生運動に参加したこともあるが、自身の世代は国家を重んじる上の世代の作品も、それとは距離を置く下の世代の作品も理解したうえで、それとは異なる価値観を求めていかななくてはならないのだと語った。

「韓流」について尋ねると、「韓流」が何なのか分からない、そのようなものを作りたがっている人間が勝手に作っただけではないのかと素っ気なかった。「冬のソナタ」も見えていないという。ただし、K-POPの「少女時代」には関心があるとのことである。音楽と小説の結び付きが今後どのように展開していくのか期待を抱かせた。

3 読者のことなど

読者との関係について、両氏とも執筆するときに読者を意識することはないと言い切った。オ・ジョンヒ氏は最初の読者は自分自身であり、孤立した状態で、心が落ち着くのを待ってから書き始めるという。書くことは何の補償もない苦しい作業であり、それだけに自分の作品には愛着とともに強い執着を持っているとのことである。

キム・ジュンヒョク氏は、ただ一人の読者である自分のために書く、という表現を使った。最初に小説の世界があり、作家はそこに読者を招待するだけだ、という説明も付け加えた。そして小説家である前によい読者でなければならず、そのために多くの人に出会って学ぶことが読者に対する配慮だと語った。

オ・ジョンヒさんとキム・ジュンヒョクさんが新潟にやってきた

さらに翻訳について尋ねた。オ・ジョンヒ氏は、かつてロシア文学を読んだとき、「サモワール」がお茶を意味するのか、やかんを意味するのかわからなかったという経験談とともに、文化を伝えることの難しさを語った。すでに自身の作品が各国語に翻訳されているが、どの国でも同じように評判がよかったということがないという。それは翻訳者の力量というよりは、文化的な差によるものではないかと指摘する。オ・ジョンヒ氏は自らの作品に強い愛着を持っているだけに、表現したいことがきちんと伝わるかどうか不安に感じられるようであった。

本イベントの直前に『楽器たちの図書館』の日本語訳が出版されたばかりのキム・ジュンヒョク氏は、その過程で翻訳者から、ここに書かれている砂糖は粉砂糖か、それとも角砂糖かと尋ねられたという。考えてもみない質問をされたことで、逆にその翻訳者の仕事ぶりに信頼が持てたという。そして自ら英文学の翻訳を試みたときのエピソードに触れながら、文章が美しいことと翻訳が正確なことは比例しない、と実感をこめて語った。

本イベントは観客の多くが語学テキストを通して両氏の小説に接した韓国語の学習者であることを考慮し、自身の作品がテキストとして読まれることについても尋ねた。テキストに使用されることは予想もしない出来事であったに違いなく、答えに窮する質問ではなかったかと思う。オ・ジョンヒ氏は、自らの経験として、教科書に載っている作品は得てして退屈なものが多かったが、記憶には残っていると答えたあと、NHKの電波に乗って全国に届くことは嬉しい、国際的な名声を得たような気分になる、と冗談めかして語ってくれた。

キム・ジュンヒョク氏はひとこと、自分の作品は読みやすいと思う、と答えた。ある日本人から、氏の文章には難しい表現がなくてよいと言われたことを多少、複雑な表情で打ち明けた。しかしテキストとしてふさわしいかどうかは別として、やさしく書けることは長所であり、作品を通して韓国人の思いが伝わることを嬉しく思うと語った。

どのような形であれ、日本の読者が韓国の小説に触れる機会が増えることは、作家にとっても喜ばしいことであるに違いない。また、日本の読者が今回のように韓国の作家の話をじかに聴き、交流することのできる機会はめったにあるものではない。それだけに本イベントが双方にとってたいへん貴重な時間になったことと確信する。今後、このような機会が少しずつ増え、「韓流」を超えた交流に発展することを願わずにいられない。

4 おわりに

事業の全日程を終えたとき、オ・ジョンヒ氏とキム・ジュンヒョク氏は、今回の新潟の旅は韓国語だけで過ごせたためにとっても楽だったと語ってくれた。イベント時を除き、通訳を介することなく自由に話げできたことが格別だったようである。

今回、ボランティアとして事業に協力してくれた「新潟で韓国と北朝鮮の現代小説を読む会」のメンバーは全員が新潟市とその近郊の在住者であり、韓国語は上級以上のレベルである。この中には県立新潟女子短期大学の卒業生も含まれている。普段は一般企業のほか、官公庁や言論機関、語学教室で、またはフリーの形でそれぞれの仕事に語学力を活かしながら、さらに上を目指してレベルアップを図っている。このような人材を有することは新潟県の誇りと言ってもよいと思う。

観客へのアンケートは80枚を回収し、たいへんな好評を受けた。県内はもとより、県外からの来場者にも本学の特色をアピールすることができたことを嬉しく思う。本事業の成功がこれからの一歩進んだ交流の足がかりとなり、新潟発の日韓交流が進展することに期待とともに責任を感じている。

謝 辞

本事業は平成23年度新潟県立大学教育研究活動推進事業のうちの社会貢献活動推進事業に採択され助成を受けた。この場を借りて、感謝の意を申し上げる。

-
- 1 平成21年3月発足。月1回、読書会を開き、韓国と北朝鮮の現代小説を読むほか、最近は翻訳活動も行っている。会員制ではないのでメンバーは固定していないが、現在は12名程度が関わっている。
 - 2 小澤征爾・村上春樹『小澤征爾さんと、音楽について話をする』、新潮社、2011.11。

